

新潟大学全学英語教育カリキュラム改定の成果検証[†]

ハドリー浩美*

新潟大学教育・学生支援機構グローバル教育センター*

本研究では、2011年度に改定された新潟大学全学英語教育カリキュラムの成果検証を試みた。使用したデータは、TOEIC IP スコア、大学入試センター試験の成績、e-learning による課外学習時間、学生による授業評価、教員による成績評価およびクラス・サイズであった。TOEIC IP スコアおよび e-learning による課外学習時間からは、本カリキュラムによる一定の教育効果が認められた。TOEIC IP スコアからは、習熟度別クラス編成を継続する必要性も確認された。他方、効果的な自学自習に関する知識が学生に不足している可能性があること、読解授業に対する学生の満足度が概して低いこと、より適正な成果検証のためには成績評価の標準化が望まれること等の改善すべき課題が抽出された。

キーワード：英語教育カリキュラム成果検証、高等教育、EFL、EGAP、TOEIC、学生による授業評価

1. 背景と目的

新潟大学では2004年度に抜本的な英語教育改革案の策定に着手し、翌2005年度からは新たな全学共通の英語教育カリキュラム（全学英語教育カリキュラム）を段階的に発展させて実施した（新潟大学全学英語教育委員会 2005, 新潟大学教育・学生支援機構教育支援センター外国語教育部門英語企画部 2010）。同カリキュラムでは、全学共通英語教育の目標を、各学部での特定学術目的の英語（English for Specific Academic Purposes）の土台となる一般学術目的の英語（English for General Academic Purposes）に定め、習熟度別クラス編成を行うことにより履修者のレベルに合わせた指導を可能にした。同時に、履修者が比較的早い時期に自らの英語運用能力を客観的に把握できるよう、原則として1年生全員にTOEIC IP の受験を課すことにした。一方、授業外では、自律学習を促進すべくネットワーク型英語学習教材（アルクNetAcademy2）を順次導入し、学部生・大学院生全員が時間や場所を問わず、各自のレベルとニーズに応じた学習ができる環境を整備した。この自律学習のきっかけとなるよう、2008年度から「基礎英語」にて同教材による課外学習を成績の一部に反映させることにした。

2011年度には全学英語教育カリキュラムをさらに改良して、目標とする一般学術目的の英語運用能力の育成を前面に打ち出し、非常勤講師を含む担当教員対象

のFD等により質的改善に取り組んだ（新潟大学全学教育機構英語教育企画開発室 2010）。それとともに、1年次の授業を同年2コマから4コマに倍増して、量的改善を図った。NetAcademy2を利用した課外学習の機会も増やし、「基礎英語」に加えて「アカデミック英語（リーディング）」の履修者に対しても必修とした。

2014年度末には、1年生から4年生までが改定後のカリキュラムで英語を学修したことになる。そこで4年間のTOEIC IP、課外学習状況、授業評価等のデータを用いて、2011年度改定カリキュラムによる成果を検証することにした。

2. 全学英語教育カリキュラム改定前と

改定後の英語科目および履修パターン

2005年度から2010年度（平成17年度から平成22年度）の全学英語教育カリキュラム（旧カリキュラム）における標準的な履修パターンは次のとおりである。1年生は入試成績等に基づいた学部別・習熟度別クラスにて、第1学期に「共通英語」（1単位）を履修し、学期末にはTOEIC IPを受験する。第2学期はTOEIC IPスコアによる学部別・習熟度別クラスにて「基礎英語」（1単位）を履修する。ただし、TOEIC IP で470以上を獲得して「基礎英語」の単位認定を受けた学生は、第2学期に「発展英語」（2単位）を履修する。TOEIC IP 470未満の学生は、2年次第1学期に「発展英語」を履修す

[論文]

る。この他に、英語の重点学修を選択した理学部・工学部の学生には、特定学術目的の英語への橋渡しとなる「理工英語読解」が必修となる。上位科目としては、全学生を対象とする選択科目「応用英語」が用意されている。

2011年度（平成23年度）以降の改定版全学英語教育カリキュラム（新カリキュラム）における標準的な履修パターンは次のとおりである。1年生は、旧カリキュラム同様、第1学期には入試成績等に、第2学期には第1学期末に受験したTOEIC IPスコアに基づく学部別・習熟度別クラスにて学修する。第1学期には英語のインプットを重視した「アカデミック英語（リーディング）」（1単位、日本語母語話者教員が担当）および「アカデミック英語（リスニング）」（1単位、主に英語母語話者教員が担当）を履修し、第2学期にはアウトプット中心の「アカデミック英語（ライティング）」（1単位、上位クラスは英語母語話者教員、下位クラスは日本語母語話者教員が担当）および旧カリキュラムから引き継いだ「基礎英語」（1単位、TOEIC IP 470以上で単位認定）を履修する。これに加えて、選択科目として「発展英語」「応用英語」が用意されているほか、旧カリキュラム同様、英語の重点学修を選択した理学部・工学部の学生には「理工英語読解」が必修となる。

表1に新カリキュラムにおける新設3科目（標準的な履修パターンでは必修）と、それに対応する旧カリキュラムの2科目（標準的な履修パターンでは必修）についてまとめた。シラバスに関しては、旧・新カリキュ

ラムとも、教員の専門や個性を十分に生かせるよう、具体的な授業計画や成績評価、使用教材は担当教員に一任されている（「アカデミック英語（リーディング）」のみ授業評価の一部共通）。ただし、「発展英語」ではシラバスの「科目のねらい」「学習の到達目標」が、旧カリキュラムの「共通英語」および新カリキュラムの「アカデミック英語」科目群では、それに加えて「科目の概要」が統一されている。

3. 方法

旧・新カリキュラムでの TOEIC IP スコア、NetAcademy2 を利用した課外学習時間数、学生による授業アンケート調査の結果を主な指標として、新カリキュラムにおける英語教育の成果を分析した。

3.1. TOEIC IP テスト

履修者の英語運用能力を把握するために、新潟大学の新1年生全員を対象に毎年7月に実施される TOEIC IP テストのスコアを分析した。旧カリキュラム時代の2005年度から2010年度、および新カリキュラム実施後の2011年度から2014年度のスコアを使用し、各年度の平均値を求めて分散分析を行った。ただし、すでに TOEIC を受験して「基礎英語」等の単位認定を受けた学生、および初修外国語の重点学修により英語を履修する必要がない法学部の学生は受験を免除されているほか、個人的な事情で受験できなかった学生も若干存在する。加えて、2014年度には、経済社会を牽引するグローバル人材育成支援（GGJ）事業の実践英語

表1 旧・新カリキュラムを代表する科目

科目名	履修時期	単位数	週コマ数	定員	成績評価
<u>旧カリキュラム</u>					
(1コマ90分)					
共通英語	1年次第1学期	1	1	40	各教員の裁量
発展英語	1年次第2学期または 2年次第1学期	2	1	20	各教員の裁量
<u>新カリキュラム</u>					
(1コマ90分)					
アカデミック英語 (リーディング)	1年次第1学期	1	1	40	80%各教員の裁量 20%NetAcademy2
アカデミック英語 (リスニング)	1年次第1学期	1	1	40	各教員の裁量
アカデミック英語 (ライティング)	1年次第2学期	1	1	30	各教員の裁量

プログラム S.P.A.C.E. (Skills Program for Academic and Content English) を履修する 1 年生に対しては TOEIC IP を任意受験としたため、6 名が受験しなかった。

3.2. ネットワーク型英語学習教材 NetAcademy2

言語習得のためには授業外での学習時間の確保が必須であることから、履修者の課外学習状況を把握するために、1 年生全員の NetAcademy2 による学習総時間数を分析した。これは、システム内に記録されている各コースの学習履歴から学習時間を出力して合計した時間数である。

上述のとおり、全学英語教育では 2008 年度から TOEIC470 未満の 1 年生を対象とした「基礎英語」履修者に対して、同教材による課外学習を必修としているが、新カリキュラム初年度の 2011 年度からは、1 年生全員を対象とした「アカデミック英語 (リーディング)」においても同教材による課外学習を課すことにした。2013 年度には「スタンダードコース」「スーパー・スタンダードコース」に加えて「PowerWords コース・プラス」「英文法コース」「TOEIC(R)テスト演習 2000 コース」の 3 コースを導入し、課外学習環境のさらなる整備を図った。

3.3. 学生による授業評価

旧・新カリキュラムにおいて、履修者がどのように授業および履修者としての自己を評価しているかを把握するために、新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センターが 2006 年度より学期毎に実施している、学生による「授業アンケート」のデータを分析した。

3.3.1 旧・新カリキュラムの科目別満足度

はじめに、「授業アンケート」の項目番号 18「この授業を受講して総合的に満足している」かどうかについて、科目別平均値を旧・新カリキュラム別に分析した。対象としたのは、表 1 に示した新カリキュラムにおける新設 3 科目とそれに対応する旧カリキュラムの 2 科目 (上記 5 科目は標準的な履修パターンで必修) である。旧・新カリキュラム共通の「基礎英語」「応用英語」「理工英語読解」等は除外した。また、新規履修者による授業評価を主な対象としたため、再履修者専用クラスは除外した。

回答形式は 5 段階評価となっており、「非常にあてはまる」を 2、「ややあてはまる」を 1、「どちらともいえない」を 0、「あまりあてはまらない」を -1、「全くあてはまらない」を -2 として平均値をとった。

3.3.2 新カリキュラム 4 年目の授業評価

つぎに、斉田 (2009) を参照しつつ、新カリキュラムにおける新設 3 科目 (194 クラス) で、開設 4 年目となる 2014 年度に実施された授業アンケートから、「出席状況」「自学自習」「達成感」「満足度」のデータを抽出して分析した。アンケートの提出がなかった「アカデミック英語 (リーディング)」1 クラス、「アカデミック英語 (リスニング)」3 クラス、「アカデミック英語 (ライティング)」1 クラスの計 5 クラスは、分析から除外した。

授業アンケートの項目番号 1, 4, 15, 18 がそれぞれ「出席状況」「自学自習」「達成感」「満足度」を測定するものとみなし、クラスごとに平均値を集計して分析に用いた (斉田 2009)。各項目のアンケート調査票上の表記は次のかぎ括弧内のとおりである。

項目番号 1 「この授業にはどのくらい出席しましたか」(出席状況)

項目番号 4 「時間外に自発的にこの授業に関して自学自習をした」(自学自習)

項目番号 15 「この授業の達成目標は、達成された」(達成感)

項目番号 18 「この授業を受講して総合的に満足している」(満足度)

各項目の回答形式は 5 段階評価となっており、「非常にあてはまる」を 2、「ややあてはまる」を 1、「どちらともいえない」を 0、「あまりあてはまらない」を -1、「全くあてはまらない」を -2 として平均値をとった。出席状況については、全回出席、1~2 回欠席、3~4 回欠席、5 回欠席、6 回以上欠席、から選択するようになっており、順に 2, 1, 0, -1, -2 の数値に置き換えた。

これらの 4 項目に加え、担当教員による成績評価 (0~100 点) および TOEIC IP スコアのクラスごとの平均値と、各クラスの履修者数を分析に加えた。成績評価に関しては、「アカデミック英語 (リーディング)」にて NetAcademy2 の課外学習を 20% の割合で反映させているほかは、すべて各担当教員の裁量に任せられている。

4. 結果と考察

4.1. TOEIC IP テスト

4.1.1 全体的な結果

TOEIC IP受験者の記述統計量を表2に示した。合計点の平均値は新カリキュラム初年度以降、456.9, 468.8, 482.1, 489.8と上昇した。分散分析を行った結果、有意差が認められ($F(3, 8949)=34.12, p<.001$)、Tukey法による多重比較では、2011年度から2013年度までは統計的に有意な上昇が続いたことがわかった。一方、標準偏差は115.3, 115.5, 118.3, 123.1と次第に増加しており、旧カリキュラム時代(最小107.7, 最大114.9)と比較しても得点のばらつきが拡大していることがわかる。このことから、今後もひきつづき習熟度別にクラス編成を行うことが妥当であろうと考えられる。

一方、国立大学1年生の2011年度から2014年度の全国平均(受験時期不明)は、順に452, 451, 456, 455(リスニング・セクション: 246, 247, 249, 249, リーディング・セクション: 206, 204, 207, 207)であった(国際ビジネスコミュニケーション協会TOEIC運営委員会提供資料2012, 2013, 2014, 2015)。合計点では新潟大学が全国平均よりそれぞれ約5点, 18点, 26点, 35点上回っている。

4.1.2 学部(学科)別の結果

2005年度のTOEIC IPの得点を分析した中畝ほか(2006: 45-46)は、学部による差が大であることを指摘しているが、2006年度以降も学部(学科)によってかなりの差があることがわかった。学部(学科)別平均値でみると、医学部医学科が最も高く、経済学部夜間主コースが最も低い傾向が続いている。直近の2014年度を例に挙げると、医学部医学科では平均値が681.4(標準偏差103.9)であったのに対し、経済学部夜間主コースの平均値は273.6(標準偏差58.8)であった。

新カリキュラム移行後における学部内での最大値と最小値の差は工学部で最も大きく、2011年度は800, 2012年度は810, 2013年度は820, 2014年度は805であった。なお、工学部における2012年度, 2013年度, 2014年度のTOEIC IP最高得点者は留学生であった。

表2 TOEIC IP スコアの記述統計量

	年度	受験者数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
合計	2005	2199	427.8	108.7	145	910
	2006	2193	426.1	109.5	90	945
	2007	2214	431.3	108.1	150	975
	2008	2225	417.4	107.7	150	955
	2009	2246	428.7	113.0	15	960
	2010	2208	452.7	114.9	145	975
	2011	2249	456.9	115.3	145	980
	2012	2236	468.8	115.5	145	955
	2013	2226	482.1	118.3	145	965
	2014	2243	489.8	123.1	145	975
リスニング	2005	2199	236.7	55.1	80	495
	2006	2193	238.7	56.9	80	485
	2007	2214	241.7	55.7	95	495
	2008	2225	232.7	52.7	85	495
	2009	2246	237.3	53.2	10	495
	2010	2208	247.3	60.8	85	495
	2011	2249	249.4	55.2	80	495
	2012	2236	255.7	58.0	80	495
	2013	2226	262.9	57.7	90	495
	2014	2243	263.6	61.2	90	495
リーディング	2005	2199	191.1	64.5	25	440
	2006	2193	187.4	62.5	5	460
	2007	2214	189.6	62.1	55	480
	2008	2225	184.7	63.9	45	460
	2009	2246	191.4	69.0	5	465
	2010	2208	205.3	64.7	35	480
	2011	2249	207.5	69.3	45	485
	2012	2236	213.1	66.9	60	460
	2013	2226	219.2	70.4	25	470
	2014	2243	226.2	71.9	50	480

4.1.3 入学者の大学入試センター試験偏差値の推移

上述のとおり、2011年度に新カリキュラムを導入して以来、TOEIC IPの平均値は全体的に上昇しているが、これは入学時の英語力をそのまま反映しているだけなのであろうか。そこで、データ化されている2007年度以降について、新潟大学入学者の大学入試センター試験の英語およびリスニングの素点を、同センター発表の平均値および標準偏差から偏差値の形に換算し

表3 入学者の大学入試センター試験偏差値の記述統計量

	年度	入学者数	平均値	標準偏差
偏差値 (英語)	2007	1931	56.56	5.37
	2008	1945	55.84	6.09
	2009	1947	56.16	6.20
	2010	1927	57.02	5.53
	2011	1971	56.88	5.03
	2012	1965	56.94	5.60
	2013	1964	57.46	5.57
	2014	1968	57.07	5.37
偏差値 (リスニング)	2007	1931	55.92	6.60
	2008	1945	54.97	7.57
	2009	1946	55.10	7.87
	2010	1927	55.98	7.06
	2011	1971	55.87	7.50
	2012	1965	54.89	7.72
	2013	1964	56.56	6.61
	2014	1968	56.46	6.09

た値を確認したところ、入学時の英語力に関しては、2011年度以降一貫して上昇傾向にあるわけではなかったり(表3)。推薦入学者や社会人特別選抜入学者など大学入試センター試験の受験を免除された入学者も一定数いるものの、TOEIC IP リーディング、リスニング両セクションの平均値上昇は、1年次第1学期科目の「アカデミック英語(リーディング)」および「アカデミック英語(リスニング)」による教育的効果の表れとも考えられるのではなからうか。

4.2. ネットワーク型英語学習教材 NetAcademy2

1年生のNetAcademy2による課外学習総時間は、旧カリキュラム時代の2008年度が15,029時間、2009年度16,843時間、2010年度16,500時間であった。新カリキュラムへの移行年度から学習総時間は大幅に増加し、初年度の2011年度が20,542時間、2012年度34,428時間、2013年度38,631時間、2014年度34,353時間となった。これを単純に入学者数で割ると一人当たりの年間学習時間は、2008年度が6時間18分(2,383名)、2009年度7時間7分(2,364名)、2010年度7時間4分(2,335名)で

あったのに対し、新カリキュラム移行後は、2011年度が8時間40分(2,370名)、2012年度14時間44分(2,338名)、2013年度16時間28分(2,347名)、2014年度14時間35分(2,356名)となった。2014年度の学習時間が前年度より減少しているが、医学部・工学部・法学部で選抜された実践英語プログラムS.P.A.C.E.の履修者92名にはNetAcademy2による課外学習が免除されたことも影響していると思われる。

以上から、複数の科目でe-learningを成績評価に組み入れ、入学時から利用を促進することにより、授業外での英語学習時間が担保されたものと考えられる。

4.3. 学生による授業評価

4.3.1 旧・新カリキュラムの科目別満足度

図1、図2に、「授業アンケート」の項目番号18「この授業を受講して総合的に満足している」かどうかについて、旧・新カリキュラム別に科目別平均値の推移を示す。新カリキュラム科目「アカデミック英語(リーディング)」の満足度は一見すると毎年わずかながら上昇しているものの、旧カリキュラム下での読解科

目「共通英語」と同様に、「やや満足している」レベルには届いていない。一方、旧カリキュラムのコミュニケーション科目「発展英語」、新カリキュラムの「アカデミック英語（リスニング）」および「アカデミック英語（ライティング）」の満足度は、「やや満足している」レベルを超えている。これらの科目では、受信的なリスニングやリーディングだけでなくスピーキングやライティングといった発信的な活動を含んでいる。このことから、旧・新カリキュラムにおける読解科目の満足度の低さは、読解クラスでの学習が受動的になりがちであることが一因ではないかと考えられる。両カリキュラムの科目のうち、最も満足度が高い科目は「発展英語」（日本語母語話者教員または英語母語話者教員

が担当）であった。これは、ひとクラス20名という少人数クラスが可能にした双方向型授業の効果ではないかと推察される。また「発展英語」では日常生活に密接したコミュニケーション技能養成を目標としたため、これが履修者の満足度に反映されたのかもしれない。

4.3.2 新カリキュラム4年目の授業評価： 授業評価項目等の記述統計量

表4に、新カリキュラム科目「アカデミック英語（リーディング）」「アカデミック英語（リスニング）」「アカデミック英語（ライティング）」の合計189クラスにおける「出席状況」「自学自習」「達成感」「満足度」「成績」「TOEIC IP」「履修者数」の記述統計量を示す。

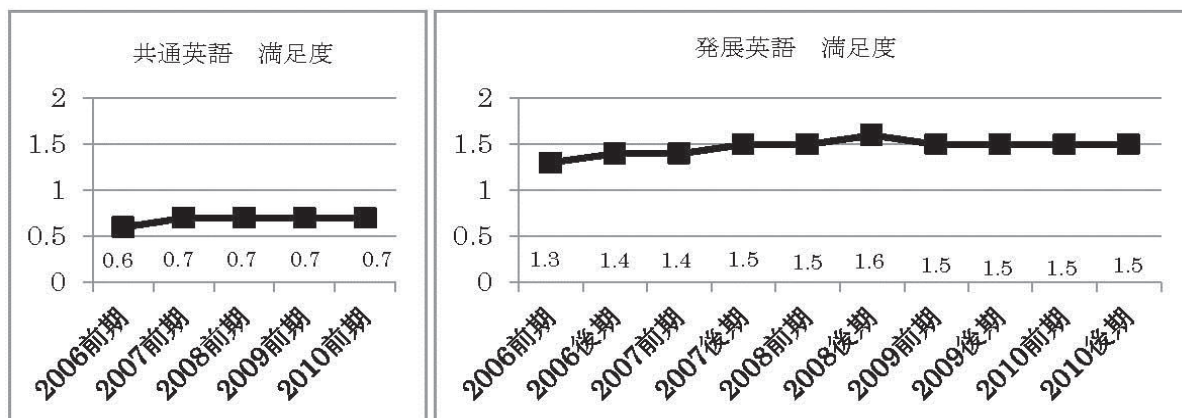


図1 旧カリキュラム科目の満足度

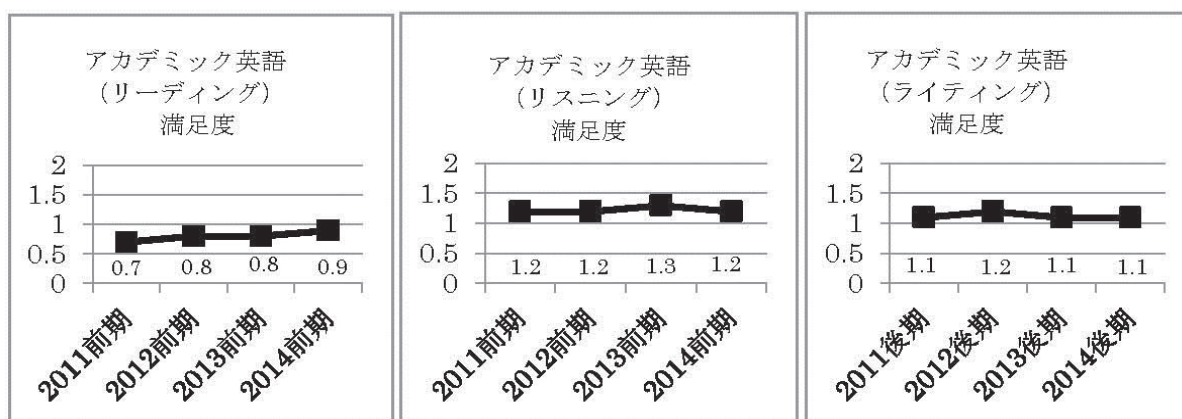


図2 新カリキュラム科目の満足度

表4 2014年度新カリキュラム授業評価項目等の記述統計量

	クラス数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	歪度	尖度
出席状況	189	0.60	2.00	1.52	0.23	-0.73	1.17
自学自習	189	-0.80	1.60	0.60	0.45	-0.54	-0.18
達成感	189	0.30	1.70	1.02	0.26	-0.21	-0.06
満足度	189	0.10	1.70	1.07	0.34	-0.58	-0.28
成績	189	60.20	96.80	80.21	6.66	-0.15	-0.27
TOEIC IP	189	246.10	745.60	488.97	91.21	0.07	0.06
履修者数	189	11.00	44.00	33.45	6.60	-0.44	-0.39

2014年度の「出席状況」を見ると平均値が1.52、歪度は負であり、一般的には悪くないようである。「達成感」および「満足度」の平均値は「ややあてはまる」のレベルで、歪度も負であることがわかった。他方、「自学自習」の平均値は他の項目より低くなっているが、歪度は負であることから、自学自習をほとんど行わない学生の数はそれほど多くはなさそうだ。「成績」の平均値は「優」に該当する80.21であった。ただし、「成績」に関しては、上述のとおり担当教員の裁量にほとんど任されているため、教員間の評価方法の違いによる得点の差が相当あるものと推察される。

つぎに、科目別の平均値および標準偏差を表5に示した。まず、第1学期開講の2科目を見ると、日本語母語話者教員が担当する「アカデミック英語（リーディング）」では、「自学自習」の平均値は比較的高いが「達成感」や「満足度」は他科目より低くなっており、「自学自習」の努力が十分に報われていない可能性がある。読解力強化のための効果的な学習方法がわからないのであろうか。「達成感」や「満足度」の低さは、やはりリーディングの授業が一面的になりがちであることにも起因するのかもしれない。他方、主に英語母

語話者教員が担当する「アカデミック英語（リスニング）」では、「達成感」、「満足度」とも履修生から高めの評価を受けており「成績」も比較的良好。しかしながら、「自学自習」の平均値がかなり低いことから、今後は聴解力をさらに強化するための自律学習を促進するような指導が望まれよう。

第2学期開講の「アカデミック英語（ライティング）」における「出席状況」の平均値が比較的低いのは、大学生活にも多少慣れてきた頃を実施されるためであろうか。「アカデミック英語（ライティング）」の担当教員は「アカデミック英語（リスニング）」とほぼ同じであるが、リスニングよりは頻繁に「自学自習」が行われているようである。

4.3.3 新カリキュラム4年目の授業評価： 授業評価項目等の相関係数

表4の7項目についてピアソンの積率相関係数を求め、表6に示した。「出席状況」は「成績」や「履修者数」との間に弱い有意な相関関係が見られた。

「自学自習」と有意な相関があった項目は「達成感」のみであった。ここから、「自学自習」の成果が「成績」にも反映されにくくなっていることが読み取れる。今

表5 2014年度新カリキュラム科目別の授業評価項目等の平均値（標準偏差）

科目名	出席状況	自学自習	達成感	満足度	成績	履修者数	対象クラス数 (クラス総数)
AER	1.50 (0.24)	0.83 (0.33)	0.90 (0.21)	0.89 (0.31)	79.51 (5.66)	38.00 (3.64)	57 (58)
AEL	1.62 (0.18)	0.28 (0.47)	1.05 (0.23)	1.22 (0.28)	82.41 (6.51)	38.05 (3.46)	55 (58)
AEW	1.45 (0.25)	0.66 (0.38)	1.09 (0.27)	1.11 (0.36)	79.15 (7.15)	26.79 (3.72)	77 (78)
3科目全体	1.52 (0.24)	0.60 (0.45)	1.02 (0.26)	1.08 (0.34)	80.21 (6.66)	33.45 (6.60)	189 (194)

AER, AEL, AEW = 「アカデミック英語（リーディング）」「同（リスニング）」「同（ライティング）」

表6 2014年度新カリキュラム科目の授業評価項目等の相関係数

	出席状況	自学自習	達成感	満足度	成績	TOEIC IP	履修者数
出席状況	1.00						
自学自習	.00	1.00					
達成感	.03	.21*	1.00				
満足度	.11	.03	.83*	1.00			
成績	.21*	-.14	.20*	.29*	1.00		
TOEIC IP	-.15	-.10	.20*	.22*	.29*	1.00	
履修者数	.21*	-.10	-.23*	-.12	.08	-.14	1.00

* は 1% 水準で有意 (両側)

後、履修者が実際にどのような自学自習をしているのか調査し、その結果に対応したアドバイジングを行うことが課題となろう。新潟大学附属中央図書館内の外国語学習支援スペース FL-SALC (Foreign Language Self-Access Learning Center, エフエル・サルク) との連携の可能性も視野に入れて検討すべきかもしれない。今回の調査で唯一、強い相関関係が見られたのは「達成感」と「満足度」であった。「達成感」は他にも「成績」「TOEIC IP」との間に弱い有意な相関があり、「履修者数」との間には負の弱い有意な相関が見られた。しかしながら、アンケート調査票の文言を見ると、「この授業の達成目標は、達成された」となっていることから、「この授業の達成目標『履修者自身が達成した』」という意味での達成感と解釈してよいのか疑問が残る。たとえば、「この授業の達成目標は、『教員によって』達成された」と捉えた履修者はいなかっただろうか。「成績」は「出席状況」「達成感」「満足度」「TOEIC IP」と弱い有意な相関が見られた。もし「成績」と「TOEIC IP」の間に高い相関を求めらば、授業における成績評価の標準化を検討せねばならないだろう。少人数教育の効果については一般に認められているところだが、今回の調査では「履修者数」と、「満足度」や「成績」との間に負の相関は見られなかった。

5. まとめと今後に向けて

本稿では、2011年度に改定された新潟大学全学英語教育カリキュラムの成果を、TOEIC IP スコア、大学入試センター試験の成績、NetAcademy2 を利用した課外学習状況、学生による授業アンケート調査、教員による成績評価、クラス・サイズの各データを用いて検証した。TOEIC IP スコアや課外学習状況からは、新カリキュラムの教育効果が浮かび上がってきた。ま

た、履修者間の英語運用能力に大きなばらつきが認められたことから、今後も習熟度別によるクラス編成を継続すべきであろうことがわかった。一方、授業評価等のデータ分析から、今後の課題もいくつか明らかになった。具体的には、自学自習の内容や方法に関する実態調査とそれに基づく効果的なアドバイジング、読解授業における履修者の達成感や満足度を上げるための教授法、担当教員による成績評価の標準化等について十分な検討が求められる。成績の標準化に関しては、中畝ほか(2006)も提言しているところである。なお、クラス・サイズに関しては、「アカデミック英語(ライティング)」の定員30名を旧カリキュラムの「発展英語」の20名程度まで削減することによって、「履修者数」と「満足度」「成績」との間に相関が認められようになるかどうか、今後の試行と検証が望まれる。実際、ライティング科目は学生と教員双方にとって相当な時間と労力がかかるという理由で、「アカデミック英語(ライティング)」担当教員からは定員の削減が求められているところである。

新潟大学では、学事歴の柔軟化等に伴う全学英語教育カリキュラム改革が2017年度に予定されている。同カリキュラム改革には、GGJ事業の実践英語プログラム S.P.A.C.E.を全学的に展開すること等が含まれる。改革後の英語教育カリキュラムの適正な成果検証を目指して、現在使用されている「授業アンケート」項目の見直し、ないしは全学英語科目専用の授業評価アンケートの作成を行うと同時に、一般学術目的の英語運用能力の客観的指標となる外部試験を導入して、事前・事後を含む複数回測定することが望まれる。

注

¹⁾ 大学入試センター試験「英語」の分散分析の結果は $F(3,7864) = 4.68, p = .003$ であった。Tukey 法による多重比較では、2011 年度 < 2013 年度、2012 年度 < 2013 年度という結果が得られた。2014 年度はいずれの年度とも有意差は見られなかった。「リスニング」は 2012 年度 < 2011 年度 < 2013 年度 = 2014 年度 ($F(3,7864) = 23.64, p < .001$) で、こちらも有意な上昇傾向は認められなかった。

謝辞

本稿のデータの内容や分析に関しては、新潟大学教育・学生支援機構の並川努先生、学務部の木村友果氏より多くのご教示をいただきました。ここに記して感謝いたします。本稿に誤りがあれば責任はすべて著者にあります。

参考文献

- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 (2012) TOEIC IP テスト平均スコア比較表【2011 年度】
国立大／公立大／私立大別
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 (2013) TOEIC IP テスト平均スコア比較表【2012 年度】
国立大／公立大／私立大別
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 (2014) TOEIC IP テスト平均スコア比較表【2013 年度】
国立大／公立大／私立大別
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 (2015) TOEIC IP テスト平均スコア比較表【2014 年度】
国立大／公立大／私立大別
- 中畝菜穂子, 熊谷龍一, 五島譲司 (2006) TOEIC テスト結果と入学時および入学後の英語成績との関連. 大学教育研究年報 11: 43-49
- 新潟大学教育・学生支援機構教育支援センター外国語教育部 門英語企画部 (2010) 平成 17 年度以降の新潟大学における英語教育—これまでの経過と現状について—. http://www.iess.niigata-u.ac.jp/eigo/english_education/h17_English_Education.pdf (参照日 2016.01.05)
- 新潟大学全学英語教育委員会 (2005) 平成 17 年度以降の新潟大学における英語教育. 大学教育研究年報 10: 43-47
- 新潟大学全学教育機構英語教育企画開発室 (2010) 平成 23 年度全学英語カリキュラム改定について. http://www.iess.niigata-u.ac.jp/eigo/english_education/3rd_FD2.pdf (参照日 2016.01.05)

齊田智里 (2009) 大学英語教育カリキュラム改革による授業評価と成績評価の改善報告:全学授業評価調査データ分析による改善効果の検証. *ARELE: annual review of English language education in Japan* 20: 271-280

SUMMARY

This paper reports on an evaluation of the revised English language education curriculum at Niigata University, Japan, using the following data: TOEIC IP scores, test results from the National Center for University Entrance Examination, hours spent out-of-class in e-learning, student evaluation of classes, teacher assessment of student achievement, and class size. The overall positive effect of the revised curriculum was verified to a certain degree by the TOEIC results and the number of hours spent on e-learning. The necessity of streaming classes was also confirmed. This research also found that students seemed to lack knowledge of self-directed learning strategies, and that they tended to be less satisfied with reading classes in general. In addition, the findings suggested the need for more standardized assessment of student achievement in class, in order to provide a more accurate evaluation of future curricula.

KEYWORDS: ENGLISH LANGUAGE CURRICULUM EVALUATION, TERTIARY EDUCATION, EFL, EGAP, TOEIC, STUDENT EVALUATION

2016 年 9 月 5 日受理

† Hiromi Hadley*:

An evaluation of the revised English language curriculum at Niigata University

*Global Education Center, Institute of Education and Student Affairs, Niigata University, 8050 Ikarashi 2no-cho, Niigata City, Niigata ,950-2181 Japan